

台中にいた妻はカッケにかけ、台中の農村地帯の人々のご好意で医師を呼んで頂き、元気になり、無事に帰郷することができました。私と妻は終戦二十四年頃と数年前の二回当時の人々のご厚情忘れ難く、御礼のためお世話になった方々とお会いしてきました。そのとき台湾の新聞記者会見もして報道され、その新聞をおみやげに今日まで大事に記念に保存致しております。

光陰矢の如く苦難の九十年

福島県 佐藤 シイ

私は大正十年、郡山市小原田町の農家の二男と結婚し、一男一女を産んだ。夫は当時の国有鉄道に勤務し、謹厳実直、酒もたばこのまず、真面目に勤務していた。趣味といえば、サツキの盆栽いじりで、子供も可愛がり、何もいうことのない理想的な旦那様でした。

夫の実家も私の実家も農業を手広くやっております、私

は農作業を手伝い、毎日幼な子をかかえ、朝は早くから遅くまで汗水流して働いた。分家することになり、両親の若干の援助と、それまで貯えた金を出し、市内に土地と古い一軒建の家を買い、親元を離れ独立した。石垣を積んだり、庭木や大きな石を入れたり、家を補修したりで、貯金もつかい果したが、夫は見栄をはり、つぎつぎといろいろな物を買いかんだ。三十歳を過ぎ、独立して親の目の届かない生活となった途端、これまでの生活態度から想像も出来ないように人が変わってしまった。

毎晩毎晩酒を飲み歩き、友達の飲み代も、自分が持ち、月給もほとんど家に入れない状況になった。それに敷地内に借家を新築し、その家賃で収入を得ようとしたが、そんなことも家計の足しにはならなかった。子供達も大きくなり、長女は高等女学校四年、長男は旧制中学一年となり、教育費もかかり、ニツチもサツチも行かなくなってしまった。

そこで借金返済のため、国鉄を退職し、その退職金で返済し、当時大陸鉄道の職員募集に応募し、子供二

人を隣家親類に頼み、昭和十五年五月、華中鉄道上海車掌区に勤務することとなり、広島県宇品港より中国に渡った。いわゆる「日本で食いつめて、中国で一旗あげよう」という気持であったが、子供を残して遠い異国に旅立つことは、うしろ髪を引かれる思いで、本当につらかった。

鉄道官舎に落ちつき、戦況もあまりひどくなかったので、何不自由なく、けっこう楽しい生活が続いた。しかし、夫は、上海と南京との間の鉄道乗務員だったので、再三ゲリラの鉄道爆破があり、「今日も無事ですありますように」と神に祈り続け、家に帰るまでは心休まることはなかった。

その後、上海と杭州を走る鉄道の小さな石湖蕩と言う駅に転任となった。日本人は二人、中国人が四、五人で、誠に田舎であり、寂しい限りだった。治安も悪く、日本軍の兵隊が五、六人駐屯し、私達を守ってくれたが、中国人の駅員は、なかなかいうことをきかず、夫はいつも猟銃と日本の叔父から別れの時貰った日本刀を身につけて離しませんでした。夜は、虫や蚊が入

ってきて、そのうえ暑さのため、あまり眠ることも出来ず、たまには大きな蛇が入りこみ、悲鳴をあげ、身の縮む思いを何回もしました。

昭和二十年八月十五日、終戦となり、日本兵はすぐどこかに行ってしまった、中国人は態度を一変し、悪口雑言を吐き、家に土足であがり、家財道具を全部持ち去って行きました。さいわいにも鉄道員でしたので、上海まで着のみ着のまま脱出し、収容所に入りました。

大陸での一攫千金の夢は消え、内地への送金などで無一文となり、やっとの思いで懐しい我が家にとどり着きましたが、食うものもなく、毎日毎日、ジャガイモ、南瓜のツル、サツマイモのくき等を食べ、実家から少しばかりの米を貰い、それに大根を入れて「オカユ」にして、空腹をまぎらわせたものです。

私は実家の農作業手伝い、夫は小さな食料品店、雑貨屋、一杯飲み屋などをしたが、どれもうまくいかず、はては山の中でイタチ等をとりに、皮をなめして売ったりしました。

しかし、子供達が二人とも学校を卒業し、それぞれ就職をし、収入を得て、やっと生活も楽になりました。子供は親に似ず学校の成績も良く、上の学校に入学したい希望もあり、勉強もしましたが、学費も出すことが出来ないのです、職につき、進学を断念させました。子供達も、戦争犠牲者の一人といえましょう。申しわけないと今でも思っております。

夫はなにをやっても駄目で、又もヤケになり、酒を飲み、金をセビリ、暴力をふるって家族を困らせていましたが、不摂生がたたり、昭和四十一年四月脳疾患で死亡しました。

私の人生の前半はなんだったんだろうか、親のいいつけで結婚し、働きづめでなんのしあわせもなかったと思います。またたく間に、年をとり、九十路の坂道のをぼりつめ、いっお迎えが来てもよい年になりました。しかし二人の子供も六十歳をこえ、現在では孫や曾孫が正月やお盆に集まり、ワイワイ楽しく、さわいでのを見るのが一番の楽しみです。米寿の祝を夫一人が欠けましたが、全員二十数人が温泉一泊で

やってもらい、今年は卒寿の祝をしってくれるそうで、みんなで老いた私を大切にしてくれ、たいへん幸福な毎日を送っています。

今、過ぎし日々を思うとき、感無量のものがあります。敗戦国民の悲哀は、全世界人類に味あわせてはなりません。それには、世界から戦争をなくすことです。

わが子に書きのこす

東京都 浅野さだ

夫は学生時代に専攻した火力発電の満州電業に就職し、大連に住む。私は縁あつて嫁ぎ当時二十三歳で昭和八年の春、はるばる大連に行きました。

翌年一月、長男晃一が生れ、私たちは旅順や金州と日清・日露の戦跡を訪ねて犠牲者の冥福を祈った。よくも当時の日本が大国に勝つたものだ、兵隊さんご苦労さまでした、と涙を流した、しかしその時、またまた、昭和六年に満州事変が起きていたのである。